

@EDGE ュビー共同代表 阿部吉倫氏 AI問診、医師負担軽く

2020/6/22付 | 日本経済新聞 朝刊

「けんしょう炎になるくらい電子カルテを書いた」。人工知能（AI）を使った問診システムのUbie（ユビー、東京・中央）の阿部吉倫共同代表は医師として救急外来で働いていた時をこう振り返る。症状の異なる患者が次々と訪れるなか、聞き取った情報や治療内容を細かく入力する。医療行為ではなく事務作業に膨大な時間を費やすことに強い違和感を覚えた。

現状を変えるために声をかけたのが、高校からの友人で共同代表を務める久保恒太氏だ。実は学生時代からAI問診システムのアイデアを温めており、2人で開発を進めていた。カルテ業務の負担を軽くして、医師が患者と向き合えるようにしたいとの思いから2017年に起業した。



ユビーのAI問診はまず患者がタブレット端末で症状や発症の時期といった質問に答える。質問からAIが疑われる病名などカルテに書く文書を提示して医師らが入力する手間を減らす仕組みだ。現在は中規模病院を中心に約200施設が導入している。

5月に新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、自宅のパソコンやスマートフォンからも問診できる機能を追加した。

阿部氏は「待合室での滞在時間を短くして院内感染のリスクを減らす」と話し、病院やクリニックの導入施設拡大につなげる。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.